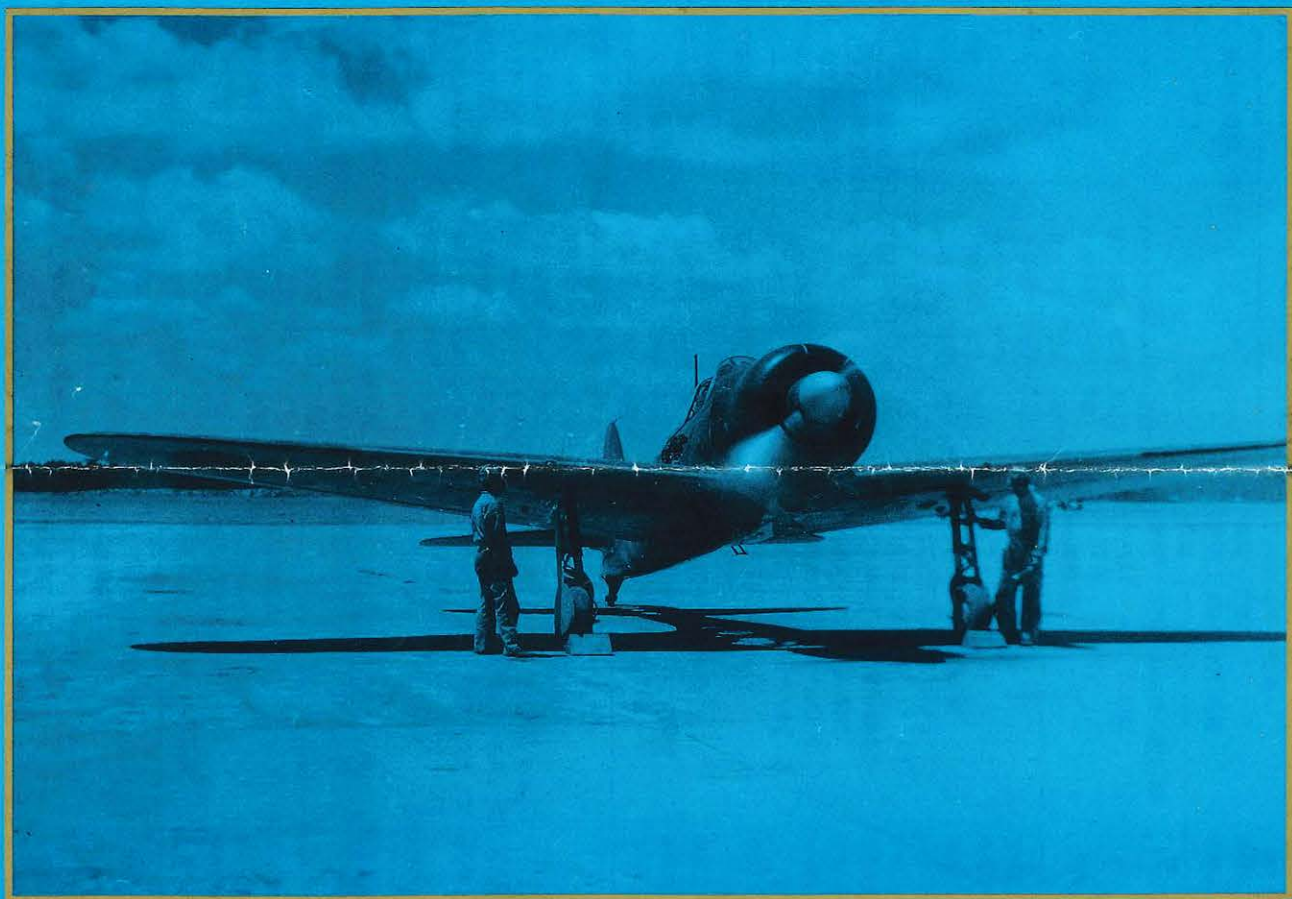


120余人の搭乗員の証言と回想  
全機種網羅、700葉の写真が語る!!

# 海軍の翼

全3巻

◆海軍航空機写真集◆



国書刊行会

# 海軍の翼

全3巻

揃定価 22,000円  
(本体 21,359円)



栄光の翼を一堂にした  
出版の金字塔

仕 様
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ A4判 上製 箱入</li> <li>・ ネービーブルー特製布貼表紙</li> <li>・ 本文アート紙使用</li> <li>・ 本文2色印刷 各128p</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 分割払可 (2回・4回)</li> </ul>

推薦団体 (順不同)

・海空会・潮会・(財)海原会

・甲飛会・雄飛会・特飛会

・丙飛会・特空会・零戦搭乗員会

お申し込みは……

発行



国書刊行会 〒170 東京都豊島区巣鴨3-5-18  
☎03(917)8287 FAX.03(940)2653



発刊にさいして

鵬翼連ねて太平洋を圧した帝国海軍航空隊の全ての航空機を網羅各機ごとに、かつての搭乗員の証言、奮戦記、回想などを加えて肉声伝わる海軍航空機全集が完成した。

民族の英知と汗の結晶である海軍の翼は、敗戦と共に滅し、幻となって久しい。本書に収録した生きた雄姿は、三十余年に亘って収集された野沢正、岩田尚コレクシヨンをもとに、編集部も三年余の歳月をかけて、遂に甦る海軍航空機の全貌となったのである。

戦前、戦後、また将来、この写真集を超える海軍航空機の総集はあり得ぬであろう。

南冥の空に散り、荒海に没し、敵艦に肉弾となって砕けた勇士達に、鎮魂の譜として本書を捧げる。

国書刊行会

海軍の翼 戦闘機篇

序にかえて 零戦搭乗員会会長 藤田 怡与蔵

艦上戦闘機

スパローホーク、一〇年式、三式、九〇式、九五式 九六式一型、二型一型、二型二型、四号 零式一型、二型、二型二型、三型、五二型 一七試「烈風」

回想 一八歳の興奮と感激 つぎはぎの九六艦戦 連合艦隊最後の九六艦戦 一二試艦戦から零式一型へ 零戦武装実験に従事して 三空零戦隊の一二月八日 ガ島上空の死闘 「その零戦、デッコー」 高雄上空、夜間戦闘 燃料指針「ゼロ」で迎り着く 二〇ミリ機銃の威力 泥縄のテストパイロット 零戦五二型初搭乗で洋上飛行 ゼロ・ファイターの誇り 国力の限界を示した零戦 攻撃重視の零戦 今、硫黄島の空遠く 愛機「零戦」を想う

局地戦闘機

雷電二一型、三一型、三三型 紫電一型、二型(紫電改)、三二型 一八試「震電」、一八試「天雷」、試作「秋水」 回想 雷電に生きて 必殺の垂直攻撃 どでかいやつ 我が愛する紫電 愛機紫電改との巡り会い 紫電改 信濃に着艦す 白いガス

夜間戦闘機

月光二一型、二三型 彩雲夜戦型、彗星夜戦型、極光 回想 全機夜間戦闘機二改装セヨ 念願の月光搭乗記

水上戦闘機

一晩でB29五機撃墜 遠藤大尉との別れ 厚木航空隊の終戦 回想 歴史に残るユニークな機種 翼なき航空隊 赤い「強風」 呉空の強風

海軍の翼 艦攻・艦爆・陸攻篇

海原会会長 前田 武

序にかえて

艦上攻撃機 ホ号甲型、ソッピス・クック、ブラックパン 一〇年式、一三式、八九式、九二式、九六式 九七式一型、二型、二型二号 天山一型、二型 流星、流星改

回想 八九式艦攻の思い出 出撃を見送った九六艦攻 九七艦攻での失敗 着艦初体験 艦攻一筋の四年間 艦内から出て来た工具一式 血肉を分けた九七式三三 九七式三三 二型艦攻 九七艦攻、駆逐艦を撃沈す 四五度の急降下 「帝国海軍は降伏せず」 天山艦攻の振動対策 傾いた方向舵 パワフルな流星

艦上爆撃機

九四式、九六式 九九式一型、二型 彗星二型、三三型、四三型 回想 昭和一九年の九六艦爆 被弾六四発 特攻用九九式艦爆 翼なき搭乗員

観測機/哨戒機

零式水上観測機 陸上哨戒機「東海」 回想 ゼロカンの設計者に感謝 零式水上観測機 空襲下の零式観測機 零戦の想い出あれこれ 零式観測機の想い出 オホーツク海の対潜哨戒 哨戒機「東海」

輸送機

零式一型、二型、九六式、一式、深山改 九七式輸送機、晴空、蒼空、特殊輸送機 回想 零式輸送機 「深山」との七カ月間 曳航機なきグライダー空挺隊

練習機

カーチス、ファルマン、デベルデッサン、ホ号小型 ホ号乙型、ソッピス、アヴロ、イ号甲型 一三式、零式水練、九〇式水練、九〇式機作練 九三式中練、二式初練、二式中練、九九式練爆 白菊 二式練戦、零式練戦

特別攻撃隊

回想 特攻! 大義隊 冷酷無策な白菊特攻 知られざる「白菊」特攻隊 白菊で散った若い隊員達 水偵特攻抄録 一回だけの桜花搭乗 特攻機「桜花四三乙」 桜花、発進ス

陸上攻撃機

九三式、九五式 九六式一型、二型、二三型 一式一型、二型、二四型 陸上爆撃機「銀河」、一三試「深山」、一七試「連山」

回想 日本号、最後の飛行 六回の不時着 片肺飛行 一変した航空作戦 九六陸攻二型の馬力向上 全幅の信頼をおけた九六陸攻 想い出つきな九六陸攻 兵員を励ました低空飛行 引掛ったゴムボート 死の四番燃料タンク テニアン、父島、片肺飛行 終戦前夜の墜落 一二試中攻の実用実験 陸攻と共に 守護神、後尾の機銃 南の空へ 空母ラングレーを爆沈す 雷撃とは男のする事也 台湾沖第一次攻撃隊 高度八〇〇〇、上昇限度 敵船同雷撃 二度も戦死の強者 搭乗員救出 一式陸攻G4M3改造型 海軍機の写真撮影機材 桜花搭載の一式陸攻 残念な六つの問題点 間一髪、テスト飛行 激闘、台湾沖航空戦 軽快な操縦性の「銀河」 銀河での宙返り 銀河しか知らないひな鷺

特殊攻撃機

一七試「晴嵐」、橘花 序にかえて 甲飛会全国本部長 大西 貞明 飛行艇 スーパーマリン・シール、F5号、一五式、八九式

海軍の翼 偵察・練習・特攻篇

九〇式一型、二型、九一式、九九式 九七式二型、二三型 二式一型、二型、二型二型、二三型 回想 四五ノットの水平飛行 飛行艇対戦闘機 大艇と共に歩んだ一〇年間 南国のロマンを求めて カウラキャンプからの脱走 幻となった強襲四ツ固め雷撃 世界最高の巨人飛行艇 ギネス以上の無着水飛行 戦艦大和を見送った二式大艇

水上偵察機

ロ号甲型、ハンザ、ショート84、一〇式、二式 一四式一型、二型、三型、一五式 九〇式一型、二型、三型、九一式 九四式一型、二型、九五式、九六式小型、零式小型 九八式、零式三座、紫雲、瑞雲

艦上・陸上偵察機

パナルパンサー、一〇式一型、二型 九七式艦偵、二式艦偵、九八式陸偵、二式陸偵 彩雲、景雲 回想 彩雲での異常体験 決死の沖縄偵察行 彩雲との出会い 最後の彩雲偵察機 星マークの彩雲





翼内の20mm機銃を長銃身の99式2号3型に換装した零式艦上戦闘機22型甲(A6M3a)。



零式艦上戦闘機二二型	
略 符 号	A 6 M 3
全 幅(m)	12.00
全 長(m)	9.06
全 高(m)	3.570
翼面積(m <sup>2</sup> )	22.438
自 重(kg)	1,863.0
搭載量	816
エンジン/馬力(hp)	栄二一型/980
最大速度(km/h)	541
兵 射 撃	7.7×2胴体, 20×2翼内
装 爆 弾	60×2(可能)

零式艦上戦闘機22型。栄21型に換装され、主翼端折りたみ部を角型に切り落とした32型は、航続力が不足したため翼端を復活し、翼内タンクを増設したのが22型であり、18年1月に制式、ソロモン航空戦で多用された。

ガダルカナル島攻撃に向うラバウル基地の零式艦上戦闘機群。21型と22型が混在しているようだが、戦時中の公表写真のため尾翼番号が消されている。



### ガ島上空の死闘

操練35期 原田 要

昭和一七年一〇月一七日、ガダルカナル上空。グラマンの一群は我が爆撃隊に一撃を加え、優速を利用して前方に急上昇をしていた。そのとき敵群のなから一機がとつじよ急反転して、我が戦闘機隊の後方に回わり込んできた。

「このヘナチョコになめたマネされてたまるか」と思うと、目がくらむばかりにぐっと操縦桿を引き、急旋回で機首を向けたが、こっちはすでに劣位からの急上昇で速度が減少しているし、敵は十分な高度差を保っている。誰が見ても明らかに私は不利な態勢であった。しかし、今はもう突進あるのみであった。優劣など考えておれないときだ。たとえ体当りしてでも、こいつを落とさねばならぬ。私は、こいつときしちがえる決心をした。敵も私に向ってくる。ぐっと下腹に力をいれて、照準器に敵の中心をいれた。引き金をぐっと握った。二〇ミリ機銃発射の反動が身体に響く。彼我の曳眼弾が交錯する。

アツと思ったその瞬間、私の左腕が大きなハンマーでガンとなぐられたように、握っていた引き金からはじきとばされた。ジーンとしばらくして左手の感覚がなくなった。機体がグラツとして異様な金属音がした。風防や計器盤に血しぶきがとんだ。どこをやられたのだろうか？と左腕を見てびっくりした。左上腕部の飛行服が大きくきけ、血のりてべつとりとなり、血が腕をつたわって手首からポトポト落ちてくる。急いで操縦桿を両足にはさみ、かろうじて水平飛行を保ちながら右手と口で左腕にゴムの止血帯を巻きつけた。

ふと、敵機はどうしたのだろうかと思っただけで、白煙を引きながらはるか下方の島影に吸いこまれるように消えていった。戦いは終わったのだ。まったく一瞬の間に、そして勝ったけれども、追跡してとどめを刺すどころか、私もあまりの深手に滞空できない。私は不時着を決意した。

被弾のためエンジンの回転は急速に不調となり、ガソリンのにおいのため呼吸が苦しい。風防をあけてかろうじて飛行しているものの、もう限界だ。不時着の地点について陸上か、海上か一瞬まよったが、負傷のことを考えて陸上を選んだ。ガソリンが引火せぬようスイッチを切る。フラップをさげ、座席をいっばいにおろす。簡単な操作だが、片腕での不時着はなかなか困難だった。

ヤシの林がぐっと迫ってくる。機首を起こしかかると眼前にヤシの葉がパツとあらわれた。操縦桿を力いっぱい引いた瞬間、私は意識を失った。